

先輩は黙って、立体駐車場の方へと車を走らせる。そのまま登り始め結局最上階まで行って、端っこの見晴らしのいい場所に車を停めた。ショッピングセンターの駐車場は平日という事もあって、屋上にはほとんど車は停まっていない。暑いので、みんなは二階か三階の屋根のあ
る場所に停めているのだろう。

「どうしたんです？」

「聞きたいか？」

どうやら趣味の話聞かせてくれるらしい。私は先輩との距離を近づけたいと思い素直に答える。

「聞きたいです」

「……わかった」

そして先輩は私の方に体を向けた。それからぼつりと言う。

「かき氷屋の社長はムカついたか？」

突然嫌なイメージが浮かび上がり、私はコクリと頷く。

「そりやもう嫌でしたよ」

それが先輩の趣味に何か関係あるのだろうか？ とにかく何の事か分からないので先輩の次の言葉を待つ。

「それを忘れる事が出来るんだが、それを知る勇氣はあるか？」

随分大袈裟だが、カッコイイ顔でそんな事を言われると頷くしかなかった。

「知りたいです。教えてください」

先輩は少し沈黙して静かに言う。

「俺の趣味は、性感デトックスだ」

「せいカンデトックス？ 聞いた事がないですね。サウナとか？」

「違う。言葉では言い表しづらい」

えーっと。

私は頭の中で今の言葉を繰り返してみる。

静観、生還、制汗…性感？？？

「あの、性的な性感ですか？」

「そうだ。性的な性感だ」

確かにそれは人には言えない趣味だ。なぜか彼は私にそれをうちあけてくれた。

「初めて聞きました」

「まあそうだろうな…」

先輩が突然しまった！ という顔をしてバツ悪そうにしている。それを見て私は、こんな冷静な人が隠した一面を白状させたことを申し訳なく思ってた。

「す、すみません。言いたくありませんでしたよね」

「そうだな。初めて言った」

私は責任を感じてしまい、先輩に謝りながら言った。

「ごめんなさい。でも、私はそう言う趣味があっても良いと思います！ なんなら詳しく知りたいなって言うくらいです！」

これは半分本心だ。一体それが何なのかは興味がある。先輩の隠れた趣味を知りたいという気持ちもあった。

「詳しく知りたい？」

「どんな感じのものなんですか？」

すると先輩はまた沈黙して少し考え込むような仕草をする。だが黙ってこちらの方に体を傾けて来て、私のシートベルトをカチャッと外し上に覆いかぶさって来た。

「えっ？」

そのまま手を反対側に回し、レバーを引いて私のシートを軽くリクライニングさせる。

「このまま教えていいか？」

「こうしないと教えられない感じですか？」

「この方がやりやすい」

やりやすい？ えっと、性感デトックスをやるって事お？

突然の事ではあったけど、それを嫌がっていない私がいた。若干興味がそそられており、先輩の真剣な表情も相まって次の答えを言ってしまう。

「じゃあ、教えてください」

「わかった」

何が始まるのか分からないが、若干ドキドキしながら次の展開を待つ。

「靴を脱いでくれ」

「はい…」

私が靴を脱ぐと、先輩は私の左の膝をグイッと掴んで上に引っ張り上げる。

「えっ…」

足をソファアーの上に乗せられ、今度は右足の膝をつかまれてソファアーに足を乗せられた。私は産婦人科のフットレストに足をかけたような姿勢になった。ひざ丈のフレアを履いていたので、スカートの裾が太ももの真ん中くらいまで下りて来る。いわゆるM字開脚のようなポーズだった。

「あの！」

恥ずかしさのあまり足を降ろそうとした瞬間だった。

スッ

唐突に私の足の間に手を入れた先輩が、パンティの上からおまんこのスジをスツとなぞる。

「あっ」

驚きと突然の感覚に、小さな声を上げてしまった。そこで先輩が言う。

「本当に知りたいのか？」

スカート越しに先輩の切れ長の目が見えていて、私を興味深く覗き込んでいた。思わずその目に引き込まれそうになりながらも、小さく頷いてしまう。

いままでなんの準備も無く、愛の言葉もないままに、いきなりおまんこを触られた事など一度もない。だがショッピングセンターの立体駐車場の車内で、いきなりM字開脚になり、パンティーの上からおまんこを触れたことに、なぜか私は凄く興奮してしまうのだった。

するすると指が上下に動き、ソフトタッチでパンティーの上からおまんこの筋をこすられた。

「…ふっ、わ…」

ぞくっぞくっぞくっぞくっ！

めちやくちや鳥肌が立ち、そのソフトタッチに私はぎゅっと肛門をしめてしまう。思わず喘ぎ声を出してしまいそうになるが、恥ずかしさが勝り声を抑えるのに精いっぱいだった。いつぶりだろう。私がUターンで田舎に戻った理由は、彼氏と別れたからだだった。それから返って

きて三カ月は、仕事を覚える事に必死で、こんなことが急に自分の身に起きるなんて思ってた。なかった。

すると先輩はポケットからハンカチを取り出して、スカートの向こうでそれを敷いている。

「あの…」

「黙って、汚れないようにするから」

私は言われるままに黙る。すると今度は社用車のダッシュボードに入っている、除菌用のウェットティッシュを取り出して手を拭きだした。シニールな光景ではあるけど、その事が私の為にやっているのだと分かり不謹慎ながらも胸が高鳴ってしまう。

先輩の手がスカートの向こうに消えた。すると、おまんこの脇のパンティーの布を指でつまむ感触がする。

「あっ…♡」

パンティーをスツと脇にずらされる。おまんこが空気に触れている感覚がわかる。すると今度は直に、クリトリスを皮の上からこすり始めた。